



「子どもたちを送る日」から

保育のはかなさ

語り手 鈴木とく(T)

聞き手 塩崎美穂(M)

●鈴木とく先生へのインタビュー

今回は、戦前戦後を通じて保育所の保育実践を支えてこられた鈴木とく先生^{*}にインタビューしました。一九一〇（明治43）年生れ、数え年で百歳になられたとく先生は、「記憶なんてあまいなものよ」と言いながらも、一九四五（昭和20）年三月十日の東京大空襲の夜に、子どもや同僚たちを探して歩いたことや、倉橋惣三と山下俊郎が発起人となって創設した日本保育学会の初期の様子について話してくだ

さいました。

およそ六十年前の一九五二（昭和27）年三月に、倉橋の企画した座談会が催されましたが、そこで保育所の実践者として鋭い発言をなげかけている、とく先生は、いま、倉橋について次のように語っています。

M とく先生と山下俊郎先生が愛育研究所で共同研究をされ、それが保育所保育指針などに反映されてきたことはよく知られていますが、とく先生と倉橋

先生とは、どのようなつながりがあったのでしょうか。何か思い出されることはありませんか。

T 倉橋先生は東京女子高等師範（現お茶の水女子大学）の人、大学の先生、大先生。あのころ、師範学校の先生といえば、とにかく偉い人だったのよ。

M そうなのですか……。とく先生は山下先生のことをよくご存じですし、一緒に保育学会を立ち上げた倉橋先生という方は、とく先生から見るとどんな人だったのか、お教えいただければ……。と思ったのですが。

T 私はね、保育学会では荷物持ちだったの。ただの荷物持ち。集金したお金を入れた巾着袋を持っている集金係。それから記録係もしたわね。でもそれは、荷物持ちでしょ。それだけよ。

M 個人的に何かお話しすることはなかったですか。

T なかったわね。

M ……そうですか。

こうして、倉橋のことを「大先生」だったとして、

あまり多くを語らないとく先生の言葉からは、当時の保育研究者と保育実践者の立場の違いのようなものが感じられます。と同時に、保育実践者に必要だった教養や保育研究の重厚な雰囲気、その大きな存在感をもって提供していた大学人、倉橋の姿も、そこに読み取ることができるように思われます。

● 「大学の先生」としての倉橋惣三

とく先生は、保育者に必要なことを、次のように述べられたことがありました。

方面館託児所で、早朝から死にもの狂いで貧しい子どもたちのお世話をした時代でさえ、くたくなになった身体を引きずって、日比谷の音楽堂まで出かけました。大急ぎで仕事用の着物を脱ぎ捨て、少しだけおしゃれをして音楽会に出かけ、むさぼるように聴きました。子どもたちの現状があ

まりに厳しいものだったからこそ、私は音楽を聴きたかった。音楽が、すさんでしまいそうな私の心を支えてくれました。演奏会でのひとときを糧にして、また次の日の保育に向かっていったのだと思います。

まだ保母という職業が軽んじられた時代でした。けれども私は、たとえば帝国ホテルの絨毯の上を歩いても、帝国劇場へお芝居を見に行っても、どこを歩いても恥ずかしくない、それだけのものを持つている人間でありたいと思っていました。

保育者は子どもの世話さえすればそれでよいというものではありません。保育以外の部分で、その人がどれだけ豊かな人間であるか、それが大切なのではないでしょうか。^{注1}

この戦前の方面館託児所に通う「あまりに厳しい」状況に置かれた子どもたちのことを、とく先生は、「騒ぐだけならまだしも、机の上は渡って歩く、小

さい子どもをいじめて泣かす、何して遊ぼうとしてもぼやーっとしてたり、言葉をかけても、ニヤーツと笑うだけだった」と書いています。^{注2}ほっとするのは、半袖で、スカートを腰までたくし上げ、子どもを次から次へとお風呂場で洗っていく時だったと言うのですから、日常の忙しさや大変さが察せられます。湯気に「頭がぼーっとしてしまふようなすさまじい」保育の中、「くたくたになつた身体を引きずつて」でも帯を締め直して音楽会へ行く。保育者が人間らしい豊かさを失わないことを、とく先生は常に意識されてきたのだと思います。

そして、倉橋を「大学の先生」だと語るとく先生の言葉からは、倉橋の著作を読み、その人の話を聞きながら保育研究に携わることが、当時、厳しい生活を背景にした子どもたちと向き合う、とく先生にとっては、保育者に必要な人間性や教養を保障する場の一つになっていたのではないかと感じました。

●一九五二（昭和27）年三月の座談会

倉橋が、本誌『幼児の教育』（第五十一巻第五号）への掲載を企画した「幼児問題を語る」という座談会（一九五二年三月三十一日東中野にて開催）の終盤、とく先生は、保育所保育実践者としての発言を求められ、倉橋と次のような意見を交わしています。

鈴木 日本の実生活程度というものは、保育所に子供をやるという程度の生活程度が大部分じゃないでしょうか。

倉橋 私が自分の孫をどこかへ入れようという時です。どこへ入れようか、幼稚園へ入れようか。保育園に入れようかと考えたとする。その場合私は国税を出してその国税のお世話になるのはすまん事だと思ふ。それで自分の孫は幼稚園に入れて、保育所に来なければならぬ人に席をゆづる。……

鈴木 ……実際はソウいう風には考えないんじゃないでしょうか。

倉橋 ……幼稚園がないから保育所をお願いするというのはまだいい。しかしそういうところに入園資格がないのに入りたいというのは、何でもかんでも人まかせという悪い習慣だと思ふ。……

当時、幼稚園の代表的存在であった倉橋に、とく先生は、自分が日々共に生きる保育所の子どもの「現実的な生活程度」、つまり下町の家族が置かれた経済状況や文化環境を考慮すれば、ごく一般的な家庭の子どもは保育所に通うことになるのではないかと尋ねています。そもそも倉橋は、この座談会を「幼稚園であるとか保育所であるとかの分け方をしないで、成程施設としては各自別箇のものになつてはいるけれども、それを一括して「幼児問題」という事についての一つの関心、共同の関心と考え」る

ために企画した、と冒頭で述べているわけです。しかし、最後にこうしてとく先生から保育所入所にかかわる意見が出されると、「国税のお世話になる」のが保育所であり、その必要のない人は幼稚園を選ぶのが望ましいという考えや、子育てを「何でもかんでも人まかせ」にしてしまうのは悪い習慣であり、「入園資格」のない人が保育所を利用するのはいかななものかと思う、といった幼保の違いを述べるに至っています。ここには、保育所は貧しい人だけのものという施設観を見ることができません。

誤解のないように付け加えれば、とく先生は、「子どもがさながらで、生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、教育の目的を、そこへもちかけていきたい」という倉橋の『幼稚園真諦』に共感し、「こういう保育がしたい」と思いながら、長い間保育を实践されてきた保育者です。「自由遊びは、保母や子どもの息抜き時間」ではなく、「自由

遊びこそ子ども本来の姿を見ることのできる時であり、その時こそが、本当の保育だ、と倉橋惣三先生はおっしゃっておられた^{注3}と、若い世代に倉橋の子ども理解を伝えてくださってもいます。つまり、子どもが自らであることを大事にする点では、倉橋ととく先生の立場は一致しているのです。

ただ現実として、保育所に通っていたのが要保護世帯の子どもであった一九五〇年代だったからこそ、とく先生は、児童福祉法が謳う全ての子どもへの保育について考え、保育所が慈善救済施設ではないことを確認したのでしょう。

インタビューの中で、「お茶の水(附属幼稚園)は附属学校。私は日本女子大出身だから、社会事業なのよ」とおっしゃるとく先生の言葉が印象的でした。同じように子どもの自由や豊かな育ちを保育の中に願いながらも、幼稚園と保育所という別建ての保育施設が日本社会につくられてきたこと、また、二

系の施設をつなぐ保育理論が思いの外脆弱であることは、とく先生と倉橋の議論から六十年経ってなお、私たちにとって大きな課題として残されています。

●保育ははかない仕事

さて、倉橋は「子どもを送る日」において、「行き届かないことが多かった」けれど「御免なさい」は言わないとしています。ここには、人間は完全であることはあり得ない、でもそれこそが人間の豊かさだといった倉橋の思想がよく表れているのではないのでしょうか。幼保の違いや、多少の年齢差はあっても、倉橋ととく先生のもつ、子どもとの別れに対する感じ方には、相通じる人間理解があるように思われます。最後に、とく先生の言葉を紹介します。

「基本的に、保育者とははかない仕事なんです。私はそれを悲しいとは思いません。幼児期のことは、記憶の彼方に追いやられていても、その子の人生の

どこかで、ふっと思い出し出してくれることがあると思うからです。それでいいのです。こちらも、時々何気なく、「そういえばあの子、今頃どうしているのかなあ」と思いたす…、そのくらいの距離感でいいのではないかと思っております^{注4}」

鈴木とく（日本保育学会名誉会員）

塩崎美穂（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）

注

1 鈴木とく著（聞き役 菅田栄子）『保育は人間学よ』

小学館 二〇〇〇年 p.175-176

2 鈴木とく著『感傷はいく野迷いあるき』全国社会福祉協議会 一九七五年 p.231

3 鈴木とく著『戦中保育私記』チャイルド教育選書

一九九〇年 p.28（傍点は本文より）

4 『保育は人間学よ』前掲書 p.144

※ 戦前には、東京帝国大学セツルメントの託児所や、愛育研究所の戸越保育園などで保育をし、戦後は、東京都の公立保育園の園長、また、保育者養成校の教員として活躍された（編集注）。